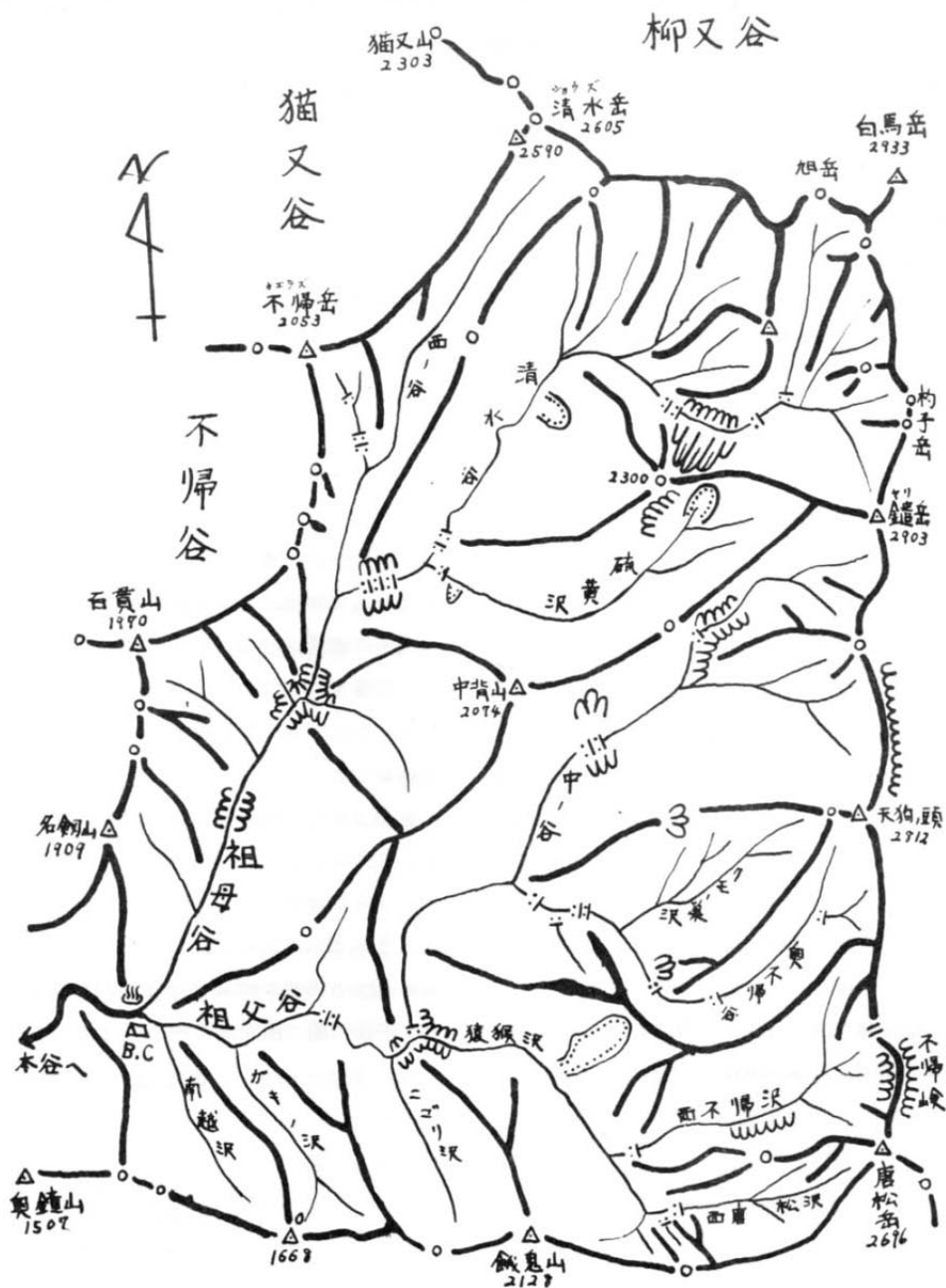




C.L. 勝野以下8名

第1期 劔岳東面R.C.T

第2期 祖母谷溯行

第3期 後立山東面偵察

山岳技術研究パートにとつて、試練の場であり、郷愁の地である黒部、そしてその沢、それは瀑布廊下、雪溪の沢、その黒部川三大支流の1つ祖母谷全本谷溯行に挑んだ。無論計画中第1期が本合宿の主眼であり、第1期のそれは我々にとつて初めての劔岳R.C.Tとして注目すべき点であり、技術高揚と第2期への体調アプローチが目的であった。そして第3期は鹿島槍岳・五龍岳東面の積雪期のための偵察を目的に大町へ下山する事であった。なお本合宿に当り、週2回六甲R.C.Tを行い第1期に備え、かつ第2期の為に大峰山下多古川溯行を行つたが多古川はガイドブックにある様に簡単な沢ではなく、三ツ道具、ワラジ必携の沢である。

行動概略

7月14日○出発

15日○大町→黒四ダム→内蔵助谷出合(de pot)→内蔵助平 (6名)

16日○内蔵助平→ハシゴ谷乗越→真砂沢小屋B.C (3名)

○内蔵助谷出合→内蔵助平→B.C (3名)

17日○B.C ⇄内蔵助平(ハシゴ谷径由) (2名)

18日○長次郎谷左俣にて雪上訓練後右俣より本峰登頂、平蔵谷下降 (6名)

19日○ハツ峰下部縦走(1・2のゴルから5・6のゴルまで) (2名)

○真砂沢→立山→劔沢下降 (3名)

20日○源次郎尾根縦走(2峰まで) (2名)

○源次郎1峰平蔵側(AフェースよりBフェース) (2名)

21日○六峰Aフェース(魚高ルート)

○六峰Bフェース (2名)

22日○六峰Cフェース(R.C.Cルート) (2名)

○七峰bルート (2名)

23日○七峰aルート (3名)

○六峰Dフェース (2名)

24日○チンネ(三ノ窓アプローチ) 中退

25日○チンネ左稜線(7・8のゴルより)

左方カンテ (2名)

○チンネ中央チムニー・aバンド・bクラック (3名)

26日○B.C移動

○ハシゴ谷→ダム→大町 (3名)

○仙人山→阿会原 (3名)

27日○大町→直江津→宇奈月 (3名)

○阿会原→樺平→祖母谷温泉B.C

(3名)

28日○宇奈月→樺平→B.C (3名)

29日～31日 沈殿

8月1日～9日 溯行

10日○B.C→唐松岳テント場 (5名)

11日○八方尾根→大町 (5名)

R.C.T概括

5級 チンネ左方カンテ

4級 六峰Dフェース・チンネ左稜線

3級 その他のルート

今回は我々にとつて岩場として初の劔岳である為、劔岳周辺把握と比較的簡単な岩場を登攀することに留めた。源次郎や七峰等は余り登攀者がないうまく取付が分りにくかつた。換言するなら3級ルートはハーケン打数が少なく、0本ルートも

多く第2期計画の爲の自由登攀訓練は十分出来たが、チンネ以外はザイルピッチ3～4で1日1ルートでは時間的徒勞に終り、合宿としては最低2ルート計画すべき処である。今後の対象として東面では源次郎尾根側壁、チンネそれにハツ峰周辺のバリエーションルートぐらいで西面が主体となろうが、池ノ谷は聞きしに優る落石の巣であることを十分に考慮して計画すべき処でもある。

1. 祖母谷今昔

黒百合にまつわる伝説と共に戦国の悲劇とロマンを現代に伝える越中富山の城主、佐々内蔵助成政の風雪の「佐良佐良越」(更々越)

越中といえは北は海、東も南も西も重畳たる山岳地域に囲まれた国。要所要所の出入口を押えられれば袋の鼠となる。

時は戦国、小牧で秀吉軍と家康・信雄軍が対陣していた頃、この小牧の役に呼応して、秀吉側の加賀藩主前田利家を打つべく、天正12年(1584年)9月成政は突如大軍を率いて能登の末森城を急襲し、そこで前田の領土を南北に断ち、一挙に勝敗を決しようとしたが、利家自らが陣頭に立つた救援軍に成政は敗退した。一方小牧の戦いは11月、秀吉・家康の引分けで幕切れ。あわてた窮鼠成政は死中活路を開くべく自らが佐良佐良越えを計画。11月下旬富山城を出、芦くらより決死の雪中行に成功し、信州野口村に着き12月浜松で家康と会見した。これが世にいう成政の雪中「佐良佐良越」である。

しかし武將成政とて決して前人未踏の山岳を強行雪中突破したのではなく、元禄年間(1688～70)越中の武將寺島職定は「商人どもが信州へ越境するのを厳重にとりしまれ。」と芦くらへ下知状を下しているように、すでに夏の佐良越え間道はあつた。とはいつても山の数すら定かでは

なく、後年越中が加賀藩領となり、天保4年(1647年)加賀藩から幕府へ報告された地図の控え(縦4m余、横5m余という大きなもの)でも劔、立山は記入されているが、それより以東はいきなり信州までとぶ。そこで成政の佐良越えルートが気になる藩は翌、慶安元年(1648年)芦くらの三左衛門、十三郎父子を案内人に立て、信州野口村まで測量を行ない、後2回に渡つて大々的な調査をし、元禄13年(1700年)の地図に初めて鷲雨ヶ嶽にはじまつて恵振ヶ嶽(今の朝日岳)までの大山脈が登場した。

一方、信州の杉人は針ノ木峠を越え針ノ木谷付近に入りしきりにネズ・ヒメコマツ・ツガを伐採していた。そこで加賀藩は毎年奥山まわり役を出し盗材を防ごうとした。又当時の越中古地図の針ノ木峠の処には「信州盗材道入口」と記入されていたという。しかし信州側もそれなりの言い分があり、黒部川までが信州野口村の持ち山だと信じ針ノ木峠には「野口山」と墨書した石標を立て、伐採小屋を建てていた。又、信州側では佐良越えルートの黒部川横断地点の「平」の名をとつて黒部川をダイラ川とも呼んでいた。そこで加賀藩の役人は伐採小屋を見つけ次第焼き払い、材木を押収し、石標には砂をこすりつけ墨痕をすりつけ、「野口山」の文字を抹消したが、いくら厳重な処置を講じても信州人の盗材は、やまなかつたという。ところが加賀藩は宝暦11年(1761年)から藩営事業として黒部奥山伐採を始めたが、どうにも越中側へ運び出せず、仕方なく盗材道を逆用して、針ノ木峠から信州側へおろさせたという。そして現在、針ノ木峠の山小屋は長野県人の経営であり、前の立札は富山営林署の掲示である。更に富山県内の針ノ木谷には大町市商工観光課の道標が立っているのはいかにも皮肉なものだ。

さてその奥山まわりの巡視路であるが、上奥山

と下奥山とに分けられ、上奥山は立山一ノ越から黒部川に下り、針ノ木谷より峠に出、南の峰々を縦走検分し、鷲羽、薬師、有峰をまわつて下山。下奥山コースは、まず越後国境の下駒三山を検分して引返し、小川温泉から北又谷・柳又谷・祖母谷を調べ上駒岳（今の白馬岳）に登り小川温泉に戻るものであるが、時として上駒以北の鉢・雪倉・恵振を縦走したり、祖母谷より更に南下し後立山谷（今の東谷）より後立山（今の鹿島槍岳）頂上を踏む時もあったという。

ここで天保14年（1843年）の下奥山日記より祖母谷付近をもう少し詳しく見ると、まず北又谷を下降して、その支流杉谷より柳又谷の楊河原で一泊し、桎籬谷を溯つて猫又谷上流で泊。翌日は現在の不帰岳避難小屋付近の清水小屋場に入り、山竹のひどいブツシュを漕いで祖母谷に下り、一日祖父谷出合までの偵察をした後、危険な徒渉を4回繰返し、祖母谷地獄の噴煙を見て祖父谷出合に着き祖父谷支流より「祖父の踊場」に登つて野宿したとある。

その祖母谷地獄の噴煙は現在もみられる。そして、わずかに4回の徒渉で祖父谷出合に着いたという点からして、かなり祖母谷温泉よりの所に下つたものと思われる。又祖父の踊場とは現名の餓鬼の田圃であり、そこに着く沢は、地図からして餓鬼ノ沢を溯つたものではないかと思う。

そして明治28、29年頃日本山岳会が出来て登山的の山行が行なわれるようになり、日本アルプス探勝が盛んになつた。まず明治40年8月地元の吉沢庄作氏らが祖母谷温泉より西ノ谷をつめ、白馬岳に登つたのが初溯行。

同42年7月には祖父谷をへて猿猴沢（？）より大黒岳へ登つた。

大正3年8月には祖母谷硫黄沢をつめ不帰嶺の初縦走がなされた。

昭和10年8月盛岡英治郎氏が清水谷をスキー下降。

同36年8月薬師義美氏らが猿猴沢より西不帰沢を溯行し、瀑布測量を行なつた。

同年8月に京大山岳部が祖父谷中ノ谷を溯行に成功した。

又、信州側から駒岳へ行くにあたり、西ノ谷より祖母谷を下り、小黒部川を溯つて駒岳に達するのが駒岳へのアプローチとされた時代もあった。

更に祖母谷温泉の名は高く、戦前には白馬鍾岳より中背山をへて温泉に着く径がつけられており、現在でもその痕跡が見られるということだ。

ここで黒部川支流をみると「○○谷」、「××沢」と入り混じっているが、これは一般に「谷」は越中側、「沢」は信州側の人によつて命名されたものといわれ、「谷」は「タニ」と発音せず「タン」又は「ダン」と訛る。それを知らなかつた国土地理院は「立山」の地図で「ハシゴ谷乗越」を「ハシゴ段乗越」と間違っているのは滑稽である。

以上の様に黒部に眠る歴史を紐解くと興味津々たるものがある。又成政が再起の為の軍資金として、金の小判を48の壺に入れて北アルプスに隠したという伝説に惹かれて黄金の亡者となつた者も多くある。その隠された地として有力視された有峰村も、黒部川唯一の徒渉点であつた平も今は共に人造湖湖底に没し、多くの支流には堰堤が築かれ、発破の音が深山に轟く今日の黒部。

それは人臭い縦走路・岩場を避け、自然の力でのみ変化を受け、野性の動物が棲息する沢の溯行に山の楽しさを見い出す私達にとつて悲しむべき秘境黒部の横顔である。

2. 猿 猴 沢

メンバー～勝野 優・川戸秀起

安沢 寛・越 智 修

8月1日(曇)6時30分B.C発。堰堤から右岸に行く。地図上祖母谷出合、右岸岩壁はなく、途中左岸へ徒歩し2回目の高巻き降口が南越沢出合(7時05分)で、その後問題なく左岸をガキノ沢(7時30分)まで行く、そこでザイル確保で右岸へ、更に腰まで浸つて20mへつり、暗くS字状に曲る処を20分程進み左岸ガレ場に着く。岩とブツシュのコンタクトラインをトラバースするが、非常に不安定でついに越智が5m程スリッブダウンして軽傷を負う。

凡そ1時間後に歩き始める。それより沢は左折し3m滝が二つ連続し、左岸張り出した岩を巻き、ほぼ左岸通しにニゴリ沢まで行く(12時20分)それより先、ついにゴルジュとなり沢芯溯行不可能で左岸の尾根を巻くべく、ブツシュを漕いだが予想外に大きくフィックスをしておいて、ニゴリ沢まで戻り幕営(14時40分)。

8月2日(曇)6時15分昨日の巻き径を行きスタカット3ピッチ40mアブザイレンで中ノ谷出合30m手前に降り立つ(8時00分)。薬師義美氏が通過に苦労された岩(61年8月溯行=岳人172号)は脆くも崩れ落ち、簡単に中ノ谷を見に行けた。そこより猿猴沢は2m滑滝を懸け右折し廊下状と思われたので奥不帰パーティーとここで別れ、降りて来たルートを再度高巻き始めた。左下に5～6本の連続瀑布を見つつ巻き続け壁の切れ目を懸垂で沢芯に戻る(12時45分)ゴルジュは巻き切つたらしく左折すると石のゴロゴロとした河原に一変し、暫く行くと巨岩で出来た二段の滝に合い右岸を巻くと(15時05分)やがて小石と砂地になり河幅は100～200m

に広がりカモシカの広河と呼ばれる処に着く。

ここは正に別天地である。15時05分幕営。

8月3日(曇)6時20分広河原を突つ走る。西不帰沢出合(6時30分)広河原の行手は50m壁に遮られる処で90度左折して西唐松沢へと続くが河幅は4～5m狭まり、兩岸は壁に一転する。我々は出合100m手前の左岸ルンゼにルートを求めた。びつしり残っている雪溪は濡れた地下足袋に冷たさ以外何も感じない。すぐ正面のガレ場に取り付き急傾斜の尾根を一気に餓鬼山稜線まで登り(9時45分)一服入れて緩斜面を少しくだると径に出た(10時00分)

○ 奥 不 帰 谷

パーティー～宮本義海・四方立夫

8月2日(曇)中ノ谷出合は滑滝が連続し凄じい飛沫を上げて落ち込み通過不可能。出合に落ちる小尾根を越して中ノ谷に入ることにし、互の健闘を祈り、猿猴沢パーティーとわかれ、左岸に渡りすぐブツシュを漕ぐ。下りは安全の為にアンザイレンしたがブツシュでのザイル操作は手こずり勝ちであるのに宮本さんのうまさは今思い出しても感心する。中ノ谷沢芯(9時20分)格別困難な所もなく、時折徒渉を繰り返すだけでスムーズに行ける。谷が北から東へ大きく右折するところは河原状となっており、まだ雪溪が点在していた。谷幅が狭まると奥不帰谷が凡そ水量を二分して勢いよく入る(11時00分)。記録文としてはこうなるが実際の印象としては、河原状の所は左岸を歩き、いつしか右岸を進んでいると不意に出合に着く。そして兩岸の尾根は迫り樹木により薄暗くなっているのに初めて気が付くといった感じで、この印象は中ノ谷溯行の時も同じであつた。さて奥不帰谷は出合よりすぐ左折して先の様子はわからない。そこで中ノ谷側を徒渉し、右岸を行

く。すぐに20m程の雪橋がありそれを左岸に渡るが、その傾斜からして10mは猶にあらうと思われる滝を懸けている様だ。雪橋先には落口の狭い2m滝があり滝身にかかる流木を利用して水に打たれながらからんで越し、早くも造瀑層に入つたが、瀑布を楽しむどころかその険悪さに苦しめられた。まず30mの空を切つて一気に落ちる滝の雄姿は実に印象的で付近にはせりも見られた。ここを小さく左岸巻くと左岸には、いわゆる「白糸の滝」と呼ばれる様な滝が100mの落差を誇っている。本谷は更に30mのくねつた滝と滑滝が連続し根の浅い草をつかんで左岸を高巻き35m懸垂で落口に立ち、昼食を取る(13時00分～13時30分)。すぐに40m程の滑滝があるがやはり直登不可能で右岸を巻き40m懸垂で沢芯に戻ると、ようやく第一の造瀑帯は息をついたらしい。ここより雪溪がつまり、正面に地図にはない白く大きな岩壁を望む頃、左手に蜘蛛ノ巣沢が入る(14時40分)。少し進んで左岸の小さな棚に二人分の小さなブラツツを設けてツェルトを被る(15時45分)。調理中に通り雨が沛然と降つて来た。

8月3日(曇)7時出発、雪溪はすぐに切れ、20m瀑布から右岸草付きを巻く。落口から再び雪溪で100m程行くと又も造瀑帯となり、先は左折して判然としないが、かなり険悪そうなので右岸小ルンゼから小尾根を越すべくルンゼを登り始めたが、すぐに切れると思われた右手の壁はいつこうに切れず、やがて昨日の白い岩壁の末端が張り出し、最上部でついに右手が60℃傾斜のガレ場とブッシュ帯になりスタックアウト5ピッチでやつと尾根上にいられた。200mは登つたと思われる。それより40mアブザイレンを混じえて沢芯に戻つた(11時20分)。再び雪溪が始まり15分程進むと正面に本谷かと思われる大

きな浅いルンゼが左岸に入り、本谷はそこで90度左折する。その屈折点は廊下と滝が連続し左岸を巻いてみたが右折している為先が望めず、壁を下る事を止めて前記の大きなルンゼまで戻り、雪溪を50m程登りガレをつめて小尾根を越し、沢芯に立つ(13時15分)。それより雪溪とガレ場が交互に続き、ついに最後の長い雪溪が始まった。ガスにつつまれ、カモシカや山百合の群生に見守られ黙々と歩くと次第に滝の音が近づき、ついに二股(14時10分)に到達した時、ガスは一瞬にして晴れ右俣入口は雪溪から上だけで50mの滝が階段状となつて落ち、雪溪はポツカと真暗な口を開けていて底は見えず、いやに不気味であるが、瀑布の直登は溯行最後の快楽を与えてくれるかの如く、全く快適なフリークライムを楽しむ事が出来た(落口14時25分)。続いて5mの滑滝が三つ続くがいずれもフリークライムで快適に越すと、いよいよつめとなり、水流も時として伏流するガレ場となり、なだらかなスロープの向うには国境稜線が見える(15時05分)。

大きな雪田とお花畑の中にツェルトをはつたが、溯行を終えた満足感が強すぎるのか、なかなかツェルトにもぐる気がしなかつた。

8月4日(晴)朝ツェルトから顔を出すと正面には劔岳が手に取る様に見える。ハツ峰・チンネ・ニードル……。

7時、素晴らしいビバークサイトを後に、可憐な花を踏みつけずに右に左に向きを変えつつ20分で稜線に出た。そこはもう黒部の延長ではなく往来に出た様だつた。

① 清水谷

パーティー～杉本健一・藤原聡

8月2日(曇)7時半B.C出発、白馬岳への夏径を30分程進み小ルンゼから本谷に降る。最初

右岸を進み、徒渉を繰返すこと6回で廊下に出くわし、右岸を高巻く。途中60m程の滝を懸けたルンゼに出た。下降可能ではあるが本谷は廊下が切れないのでやむなく巻き続け、12時前懸垂でやつと沢芯に戻る。少し先で昼食を取る。廊下は終り平凡な河原が続くが30分程で、ノドの様に兩岸が狭った処に3~4mの滝が懸かり、ザックのつり上げをして突破し、アブザイレンで沢芯に立つと再び河原状となり、スムーズに行く。左岸に枝沢一本入り、少し先でザックを降ろした(15時30分)。

8月3日(曇)7時半出発。すぐ廊下に行手を阻まれ右岸を巻く。対岸の中背山からの支沢が本谷と合すのが望まれるが、本谷は完全な廊下で上から見限りに於いて溯行は不可能かと思われ、更に巻き続けて不帰岳・百貫山の最低コルに端を発する支沢にルートを求め、本谷に降り立つ。その後は困難な所も無く西ノ谷出合まで行けた。(13時15分)。

8月4日(晴)7時35分出発。いよいよ清水谷に入る。すぐに滝が三つ連続して現われ、右岸を巻き、硫黄沢出合に着く(9時35分)。それより広河原状となりピッチ・アップして進む。大きなチョック・ストーンの懸かつた滝は右岸を巻いた。沢が大きく右折しだす手前(1500m付近)左岸には幅約400m程にも達する山出しが出来ており、今シーズン出来たものと思われるがそのスケールには少なからず驚いた(12時40分)1時半、地図上の滝(40m)は左岸を巻き出したが、滝は三つ連続しており、更に滝の左岸側壁はついに300m程にまで発達し、簡単に巻き切れると思われたこの高巻きは、壁のふちに沿って無名ピーク(2300m)に追い上げられてしまった。それを越え、コルに出て小ルンゼを下り、やつと本谷の雪溪上に立てた(6時00分)。

30分程進んでビバークした。

8月5日(晴)廊下に行く。途中の滝は問題なく直登出来、河原状となつたが、硫黄の臭気におそわれる。再び雪溪に出ると先には7~8mの滝が現われ、右岸のガレを行くと河原になり、凡そ30分で右岸に30m滝が入り、そのまま沢をつめると、いよいよ水量も減りガレ場から這松帯になり14時すぎ白馬鍾岳の稜線に出て、溯行に終止符を打ち、猿倉より四ツ谷へと下山していった。

◎中ノ谷・硫黄沢・西ノ谷

パーティー→勝野優・四方立夫・川戸秀起

8月5日(曇)B.C6時40分出発。ニゴリ沢出合(9時55分)。猿猴沢出合(10時50分)。奥不帰谷出合(14時10分)。とハイペースで来る。やはり二度目だけの価値はあつて予想外の速さである。奥不帰谷出合で左岸へ徒渉、正面約2Km先にブッシュ混じりのおむすび状の岩峰(おむすび岩=仮称)が望める。3m二条の滝(14時45分)は右が階段状で、すぐ上は右岸より15m滝となつて小ルンゼが入る。中ノ谷に入つて最初の一条の滝2m(14時55分)はシオルダーで越せるが、更に上部が悪そうなので右岸ルンゼから高巻き開始。やはり滝は上部も連続しており、五段の滑滝が全体の落差40m程となつていた。20mの懸垂で雪溪上に降り立ち、少し戻つて雪溪を降り、猫の額ほどの所に幕営(16時00分)。中ノ谷に入ってから何か地下足袋が滑りやすく、又雪溪も出て来たのでスリッパ防止や保温の為にわらじを着用することにした。

8月6日(曇)6時45分出発。昨日降り立つた雪溪の先端より次の雪溪まで右岸をトラバースしたが僅かに200m進むのにバカ程時間を食われたので3時間も費やした。その雪溪を左岸に渡り、更に10m先の雪溪に着くと、いたる処にク

レバースがあり、コンティニアスで右岸に渡り、草付きをトラバースしてバンドに出、ハーケンを支点にオーバーハングの岩を5m懸垂で下ると、核心部ともいべき造瀑帯となった。まず雪溪下には10m滑滝があり、続けざまに10m滑滝、10m、5m、5m、2mの滝、5m2条、15mS字状階段の滝と続き、いずれも右岸を直登して来る。まだ廊下帯だが左岸壁の方が厳しく、右岸からは「おむすび岩」右方ルンゼが2本入り、左岸も潤れたルンゼ3本が10m幅で入る。この辺まで来ると小滝の連続となり右岸は雑草も茂り傾斜もおちてザイルをはずす。正面には薄くガスにつつまれた二股が望まれ、廊下も切れて昼にする(11時40分～12時25分)。なお廊下全体は丸く右折していた。そこから先は橙色の鮮かな山百合もちらほら見られ、剣沢二俣よりもまだ広く感じられた(12時55分)。そこで水量は二分されるがそれ程減量したとは感じない。右股の沢幅は100m程で大きな雪溪となつていて傾斜もなく、地図から想像する厳しさはないが、先の方はガスがかかつていて確かな限りではない。左股も同様すぐベツタリと雪溪となつていたが左岸側壁が30～50m壁となつて続き、傾斜も多少あり、陽も当らず陰気である。それでも硫黄沢に入るなら左股に入らざるを得ず、500m程入り右折点で荷を置いた(13時15分)が、適当なブラツツがないので急な雪溪をビツケルで堀り、なんとかテントをはつた。又水の確保はラントクルフトから細引でポリタンを降して汲む等、悲しいビバーク地となつた。そこで沢は右折しすぐ又左折すると右岸も壁となつて完全な廊下となり、地下足袋では歩きづらい程の急雪溪であることから、この下は相当なスケールの滝が少なくとも二つ連続しているはずである。

8月7日(曇)6時半に目を覚まし、急いで朝

食に取りかかったが、それでも7時5分には出発した。右岸ブッシュ帯を直上し硫黄沢に向かう。尾根上もブッシュだが傾斜はほとんどなく2150mの小ピークに立つ(7時40分)。

女性的な容姿の清水岳・不帰岳は眼前に迫り、硫黄沢と清水谷を分ける尾根は対照的に赤茶けたガレ場で荒々しい。戦前には鍾岳—中背山—祖母谷温泉をつなぐ径があつたと聞くが、やはりその痕跡さえ認められなかつた。20分程景色を楽しみ下り始めた。比較的緩斜面を硫黄沢沢沿へ(9時00分)。降り立つた処は1770m付近で優美な姿の毛勝三山がよく見える。我々が一番いい処を下降して来たらしく、上流も下流も左岸はひどいガレで下れそうにもなかつた。四方が体の不調を訴え、食糧もまだ四日分有り、ゆつくりとした行動となつた。40分の休憩後下り始めた。兩岸ともひどいガレが続き歩きづらい。3～5mの滝が幾つかあるが水量も少なく、問題なく通過出来る。狭い砂地にカモシカの足跡と一輪の石楠花を見る。近畿より開花期が二ヶ月から一ヶ月半程遅いらしい。1500m付近からはガレも無く、地図上「硫」の字の付近からルンゼは水を含み、清水谷との出合600m手前の露岩記号は右岸の方が大きく、又300m手前からはいよいよ硫黄の悪臭が鼻をつき、奇怪な色、形の岩が目にとまる様になつた。しかし残念ながら湯は湧き出しておらず期待した「温泉湧行」は花と散つた。出合60m程手前に5m滝があり左岸を小さく巻くと、幅20mの山出しがあり、清水谷出合に着いた(12時05分)。まだおかんとするには早すぎるが大事をとつてテントをはつた。硫黄沢と清水谷、その名からしても清水谷側の水しか飲む気がしない。

8月8日(小雨後晴)今夏計画した沢の総てがこの日で終えると思うと意気揚がり3人元気に7

時出発。左岸10分、右岸5分清水谷を下ると廊下になり、右に左に徒渉を繰り返しながら少しずつ進む。時折小雨が思い出した様に降つてはすぐやむ。3m滝でザイルを出し、左岸6m懸垂で下りすぐ右岸に飛び移り、続く5m滝は右岸ブッシュを巻きかけたが、そのまま尾根を越えて西ノ谷に直接入る事にした。尾根上(8時35分)から祖母谷本谷からよく見えるがその険悪さは想像出来ない。西ノ谷へ90mアンザイレン、40mアブザイレンで降りると出合より僅に20m程入つた処だつた(10時15分)。傾斜はあるが広く滝らしきものも全く無く、背にある陽差しは強く絶えず水際を歩いた。不帰岳へ直上する支谷(本谷は右折して北東へ)の出合で昼にした(11時30分)。記録によると本谷はやはり何の変哲もなく、つめでお花畑に向えられるだけと聞くのでまだ面白そうな支谷に入る事にする。意外にも赤

沢岳西稜猫ノ耳がかすんで望めたのは印象的だつた。12時支谷に入る。水量こそ急減するが5分後には小さな廊下となり、5m、3m、4m、1mの滑滝と8m滝が続き、いずれも左岸よりをシャワークライムを楽しんだ。水がいやに冷たく感じると先には150mの雪溪があり、その先端は二股となり(12時45分)左股はスラブ上を20m滝となつていて行けず、右股を30分足らずガレ場に行くも岩雪崩の危険性が出て来たので右のブッシュ帯に入り、15時5分径に飛び出し1分で不帰岳避難小屋。小屋番の老人に美味しいお茶と飴を御馳走になり、白馬岳へ往復したB.Cの4名の様子を聞いたがどうも話が合わなかつた。

8月9日(晴)小屋の人に礼を述べて皆の待つB.Cへと下つていつた。

(工学部3回生)

